寛永諸家譜

藤原氏奏廿五冊之内廿一

支流

134

内閣文庫
番號 和 20199
冊數 186(134)
函號 特 76 1

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

根来　　斉光寺
柳原　　大塚
稲生　　石丸

寛永諸家系図傳

藤原氏　　癸二十一

支流
根来

先祖を霜月といへども盛重が河
よりいでて根来にいるゝ

盛家

霜大和　生国和泉

浅草文庫

八十四歳ゟ之死と　法名道智

盛勝

霜田殿右清つ尉　生國同前

五十九歳にて死と　法名道真

盛重

根来右京進　生國同前

天正十二年ゟ久年合戦のとき

東照大權現よりの御使者根来寺ゟ

いたゞき　厳命の旨を告くいたく

今度一山の成敗こゝろさしを

大権現ゟ通ぜんとおもひ急ゟ陣

して大坂乃城をせめとるべきもの

御使ゟ　びゝ　れ　ち　麾下

服して成敗為相議　軍勢

をゝゝゝかゝゝのとき盛重ゟびゝ

也深院前長　ゟ　ゟ　ゟ　ゟ　ゟ

しきりに紀伊の国よりこゝ
ところあるとて急をはげく
いとく岸和田の城をさてんがこの
てきをかへりくはの紀州の士卒
岸和田の敵兵よをびやうしく
味方敗北をうけ城へ敗軍の
卒をうちきんが中に紀伊よりの引
くをうとき岸和田よりも大勢
雑賀家政黒田長政中村孫平次

京都法市為中路をさうもさて
小ぐんとなこうにをひく感意見
をてをみく敵の陣屋をや
ぶり雑賀家人山中左平次
をうちその首を得をうち此義場
てをして感意が軍功祥士
よをぐれうちと地日長政をむく
人をうをて感意と英称を
長政が後話をきくその面世よも

相あるべしこのかの紀伊和泉両国
をひくあるひを城をさづき
寇讎とみせざあるひを城をせめ
利益をとりしくしく事くりくハ
あにのせを苦手根来ちにく
軍功あるものよりそのの賞として
玳瑁の池をさばく盛重玳瑁の池
三本を切るもの
同十三年根来ら破却のなる盛重
定別演出の沙城下よりいるの
大権現ゆ報謁のとき盛重を
元根来ものは師なる人よりのち
根来と称ぶ色しと　厳命あり
ゆゆ此とそのち
石清院厳
拘軍勅よりたうへ合色と
重盛ら思沛にるの事案
久し

寛永十八年七月九日八十六歳より
て死去　法名祥岩紹雲

盛正

小左衛　従五位下　お雲寺　生国
同前
慶長八年城州伏見の城より出て
はじめて
大権現へ拝謁し　同十二年　駿河

府中へ引こ[illegible]
大坂冬陣の時　父盛定と[illegible]れ
しを
大権現の幕下へ[illegible]
元和元年大坂御陣の時七月
十六日二條の城へ[illegible]
れ[illegible]地と[illegible]
同月廿一日沙弥[illegible]と頂戴を
同二年

大權現薨御のはじまりなり
名濃院殿てつへをくまゝ
沙書院番をたもし
同八年
名濃院殿の鈞命てまた
將軍家てしたへくまつれ
同九年御上洛のとき盛正
嚴命をうけ御いわ作の諸家
彈次の旅宿をまもりし還御

のとき也又かくのごとし
同十年松平新右衛門光政同幡伯耆
守を仰しつく同幡の名亂て
あるとき　名命をかうむる
沙同行として名亂てをもむき
翌年十月より
寛永二年沙歩行の頭となれり
同三年沙上洛のとき紀歩率と率
しゝ後者

同五年沙鉄炮拵筒の出来同人
五十五人をわたしけらる
同六百五百石の食邑をくゝへ給ふ
同七年より領地五百石をくゝへ
給ふ
同九年鍋島の与力十人をおぼせ
付給ふ
同十七百石の領地をくゝへ給ふ
同十四年　鉄砲命ぜられ候ふ仕下

盛次

叙し　おぢ寺の住を
同十八年十二月盛次が嫡孫の領
知をくゝへ給ふ

左兵衛　塚別伏見より出来

家牧　六葉の内蓑海丸

国立公文書館
National Archives of Japan

根来

和名成神氏貴尊といへるを
長谷の義が家をつぎて根来
と称せ

長次

成神射馬守　生國紀伊
七十二歳にして死せ　清右京亮

長巻

法名 根来寺惣深院　生国同所

七十五歳ゟ病死

貞次

左衛門尉　生国同所

寛永二年十一月廿五日　八十歳に

ちく死

長筭

法名 根来寺愛染院　生国同前

慶長六年　江戸ゟ下向し

東照大権現ゟ法ゟ入り

同五年　関原陣ゟ供奉をつとむ

元和元年五月十六日六十四歳ゟ

死

守次

平大夫　生国同所

摂州大坂天満

長谷

根来出雲守殿　生国同前

家紋　若菱丸

廣光寺

為清

豊前　生國信濃

信州ことく

東照大權現に被召出のとき

為清為時父子お彼くに忠節を

めきんぜ

八十五歳ヨリ之死ス　法名存秀

為時
丹後　生国同前　法名飯慶

為重
勘右衛門尉　生国同前
大膳亮
右衛門殿

為軍家ヲ勤仕ス　生国上野

為真
表兵衛尉　為正
伊兵衛尉　生国同前
寛永十七子二月十六日
為軍家ヲ相渡ス
同十八子小姓組ヨリ入番ス

家紋　丸の内よ遠雪の松

榊原

はるゝまゝ先祖なをゝ勢列榊原
なり十六代相伝きて榊原を
郡を地とりくゝ氏とし伝ゐて
元祖をゝ地の邦より勧請と先祖
三列よりくゝ代こゝ御面家
てはるゝまゝ戸川

●経定

主水正　生国伊勢

利経

主水正　生国参河

元経

兵三郎　摂津守　生国同前

天文六年十二月廿五日死去　法名

玉義

忠次

平七郎　摂津守　生国同前

清康君　廣忠卿　よりふさ卿

こゝのときに植村泥逆守酒井左衛門尉

なりびて忠次ホの二人とともに

家老となれる

天文九年七月廿日義死去　法名宗甫

正久

小谷才　後与右衛門と号す　生国

同前

廣恵卿よりふまれり小性少

形りその内喧嘩をいたしてり

ちて浪人ふり関東へ居る

来

又兵

正吉

義内　九右衛門尉　生国同前

東照大権現より仕へ奉る

永禄六年三月本能寺門徒蜂起

の節首級を得く　沙汰

御小

傳同国西郡沙弥一色のとき先祖

となりくしこのとき加義

勅右衛門藤をうつ
西右これを捉くまをぐく
慶長九年正月二十五日下死を
法名浄全

正成

長平次　八兵衛尉　三列額田郡より
五百七十四家ふしてもどめて
大権現ゆりたくまれ

同八年高天神の戦場にて供奉を
同十二年出久手合戦のとき仕
年の輩　仰をうけたまはり
名先手よりの正成と又先手の
場に出て鉄炮をもれち軍忠を
大ぜまた先よりさき
大権現鉄炮を正成よりの本
出ることをれいらの先なをのち
同下をしく　旗下に属し首

二級を得たり一そのほかにて掃
一そ沙汰にて翌日陣中より
をして
大權現掃部原掃津守忠政より向てこの
我切を賞じ給ふ
元和元年大坂沙汰のとき紀高木
主水正が組に屬して働きを勤
十月七日落城のときに手わたりて
永井勘九郎なりしより正成迄小
陣中に入このとき沙汰番近藤
勘右衛門にしたがへ
ゐたり
将軍家にしたがへ奉り
寛永二年十二月是非同心二十人
とあげらる
同四年十二月二十八日布衣をゆる
さる
同九年六月与力十騎と仰付られ

正重

長崎湊　甘糟武義

寛永三年

右徳院殿ゟ仕へ奉る

同六年十二月粮米を給ふ

同八年御見の御城番を仕り

ときに粮米を給ふ

将軍家ゟ仕へ奉る又

粮米を給ふ

寛永十年二百石を給ふ

右の粮米と食邑あり

合百石を仕る

正信

三大夫　甘國同前

右徳院殿

将軍家ゟ仕へ奉る

正晴

若年寄

武州江戸ゟ生れ

寛永二年七月

右浦院殿

将軍家ゟ御渇しなされ

女子

大久保二郎八郎妻

女子

服部助左衛妻

正之

長幼次

生國武蔵

寛永九年

将軍家ゟ御渇しなされ

同十四ヶ正月大御番ゟ仕る

同十六ヶ様茶をなされ

正綱

源兵衛尉　生國三河

大權現

右被院殿

將軍家ゟ被召出之

寛永九年六月十二日ゟ死去

享年六十二　法名正悦

正宣

源兵衛尉　生國相模

寛永元年ゟ

將軍家ゟ被召出之

正次

文殿兵衛尉　生國同所

寛永二年ゟ

將軍家ゟ被召出之

正勝

七左衛門　生國同所

寛永七年より

御軍家へ召し出され

正吉

左右衛門　生國參河

名濃院殿

御軍家へ召し出され

正則

四兵衛尉　生國武蔵

寛永四年より

御軍家へ召し出され

正勝

源左衛門尉　生國同前

寛永十三年より

為軍家てしたがふ

忠世

孫七郎　摂津守　生國三河

元亀三年十二月廿二日三方原にて

戦死

法名宗榮

忠政

集之助　摂津守　生國同所

九年より後府にをして

大権現御幼稚のときはつねにまつ

御小性として御足をもんで

ゐる

永禄六年参列一向ふ門徒一揆蜂

起のときは大寺の色をして一日

に六度合戦あり忠政三度首

級を得失を申て肩をやぬる

四年

大権現今川氏真と会戦一三列一文の

城をせめおとし百助をとりてこれ
をまこしめしうしなひ山と紀武田
信虎流人となれりて後府よりかへし
少へ氏真ゞ人数一万八千のうち信虎
ハ千をひきゐこゝ一文の城と籠せし
こゝにをしく
大指現軍兵二ゝをりく敵陣を
破り城てゝ入こゝ所のをでよ者をり
て器潔てゝ　還御かへりしその
行程二里のあひだ小して四度合戦し
ましまし忠政三度首級をえら四度
よりとるよ敵軍進来ゝ
ゝ三度ゝ紀てゝ大敗をへし
味方の陣ゝ引ましてきゝ
首級をえらこゝにをしく
大指現沙汰をうへし百姓ゝ命じて
のしまゝく忠政を討死せさしむ
事なれ紀忠政ゝ

ひとくまの四郎牛窪より入ぬ
同じき沢陣のとき先よりとて城
ゝ入こたをしく
大稽現集ゝ助の弓をゝ海ゝ
ゝやく城ゝ入ぬ
同七年石橋合戦のとき先ゝ
ゝゝて酒井ゝ四郎
この酒授ゝ四郎
元亀元年嫡川合戦ゝ首一級ゝ
高橋ゝ海ゝこのとき 伯ゝいたく戒
傷ゝ人形ゝ汝を伯ゝ
ゝ石賀ゝ
ゝ又 伯ゝいたく
食禄ゝくゝ
天正三年長篠合戦のとき又首級
ゝゝ
同四年高天神の戦場ゝ
首級ゝ

大隅現壱列よりしく指揮と挑戦
ときに相見の者としれて天満川乃
色てりいる
同十二年長久年合戦のとき首四
級をえしりこの分首十二級をなる
といつどとこれを梟くその首級
をそめをなる 信を受ける面を
名流院殿沙幼のとき紀ちはくて
まれ見逃 沙弥の侍をたにをく

大隅現の信より海が先祖を指揮ようら
しくなをおくしもしへとのくまも
うれてよりて指揮寄より任
寛長六年四月三日死と第六十一
法名定源

忠勝
隼人助 生國遠江
天正十六年十五のとき

名徳院殿よりくまもつるのち
ほうよりくまの書をつとむ
慶長十七年六月十二日死去歳三十四
法名清岡

忠真

兵庫頭門尉　生母同前
元和十七年
名徳院殿十一年の位ときよりさきへ
くまもつるはしきゝ忠真八年相続

某
万千代
某
三年

忠久

四郎左衛門尉　生母武蔵
元和六年十七年のとき

名護屋殿より下さる

家紋 車（くるま）

国立公文書館
National Archives of Japan

柳原

●定次

又義　生國三河

先祖累世　淨華家より出ふまつる

定次が河内にあるに

廣忠卿

東照大權現より出ふまつる

定右

又兵衛尉　生國同前

大權現

右德院殿

將軍家よりたうへくまゝ川の

寛永十六年大坂の城番をたてら

れしゝ所也

定正

日向右衛門尉　生國武蔵

寛永十二年より

將軍家てしたしくまつる

家紋　車

国立公文書館
National Archives of Japan

柳原

秀信

小右衛門尉

廣忠卿

生國三河

東照大權現より つくさせ給

信之

左八郎　生國同前

大權現

名澁院殿よりくまはる

宣信

小右衛門

名澁院殿

将軍家ゟくまはる

家敎　伊藤車

国立公文書館
National Archives of Japan

柳原

信次

石右衛門尉　生国三河

為石右衛門尉よつて

慶長元年六月十四日死之歳八十

法名永法

元次

六郎右衛尉　生國同前

思惟ていとしく

東照大権現よつくまつり

御所をけ西面して右良左の位

代々織となす

寛永十八年九月廿四日死歳七十五

法名心徳

元義

市郎右衛尉　生國同前

慶長四年九月十三日城列伏見

にしく

大権現て渇しくまゐ西

元和二年

名誉院殿小ていくしてゆ列教

寛永元年ゆ

将軍家よりつまはれる

元重

六帝蔵人　生国同所

寛永九年十一月二十四日

将軍家ゟ召出され

家筋　片桐東

柳原

おハ三橋と称し古橋よりうつりて

柳原もうつる

長富

三橋与次右衛門　生国三河

累代　沙弥家ニ仕ふ

長成

三橋左右　生國同前

東照大權現ゟ仕くまを仕り申候

鉄炮頭ゟ成申候

長勝

榊原小兵衛尉　生國武蔵

母の氏を仕ぎて榊原と称ス

慶長十九年

名誉院殿ゟ仕くまを仕り申候

為軍家てつゝゟ大御番を

仕ル

家政　車

国立公文書館
National Archives of Japan

大塚

忠右

右京亮右兵衛尉　生國參河

忠次

七郎　年右衛尉　生國同所

東照大權現

叅列合歓木村るをしく七十餘
ゐしく死を　法名宗句

忠次

平右衛門尉　生國同前
十五歳ゐして留守三郎信康を
てしたうへ大井川合戦のとき
戦功をとゞめしそのち
大権現よつゝくまり留

天正十二年長久手合戦のとき高名
を得たり　鈎命をしけるゐ
沙汰番をしたゝめ又御普請を行
ともなれ
慶長十八年二月十九日ゑ十七歳小
しく死を

重世

小右次　平右衛門尉

十三歳ゟ〳〵
名濃院殿〳〵ゟ
寛永八年
将軍家〳〵ゟ
月代

系

小若次
京世屋しなひて子と実ハ吉末
小右衛門正宗ゟ子なり吉末氏の

系図別〳〵ゟ

幕紋　九門風字

国立公文書館
National Archives of Japan

稲生

光信

七郎右衛門尉　生國三河

東照大權現ヨリ仕ヘ奉ル

光正

又七郎　のち治兵衛尉と号す

生国同前
大権現につかへ奉りける
天正三年三州長篠戦場において
組討の功ありて後武田勝頼遠州
井谷より御出張の刻
大権現御遠發ありて此時味方利をうし
なふところに原田佐左衛門
光正一人先をすゝみて敵を追ひ
みじけ退き其軍功わすらく

三州和泉村において三百石の領
地ならびにそのゝち遠州にて二百石
の地を加増せらる
天正十八年関東御入国の時替地と
して五百石を除き此所なく食
禄をとらしなはれ
慶長十七年八月廿三日駿府において
死去

正信

沢部左兵衛　生国武蔵

名護屋殿にてはくまつり大坂者
度の陣にて結束をなす小性
組にて列しく番代をつとむ

寛永九年

将軍家にてふしつり七百石の地
を給ふ

正倫

七郎左兵衛　生国同前

寛永十年より
将軍家にてふしつり御小姓の
番をつとむ

家紋　丸内七星

国立公文書館
National Archives of Japan

稲生

生国三河

●正吉

次郎左衛門尉

廣忠卿

八十四歳

法名長清

右重

七郎次郎

長崎三郎信康 生国同前

四十二歳より死去 法名安

重正

七郎次郎

榊原式部大輔康政 生国同前

四十四歳より死去 法名常俊

正照

令左衛尉

右法院殿てつくへくまいる

元和四年 伊勢を賜り武列忠の

城番をいたしそのち

為軍家てつくへくまいる

寛永十七年より御奥義の書を勤

家紋

九曜

国立公文書館
National Archives of Japan

石案　わるひとを石羅井長

石播
民部少輔
生国近江

石親
助兵衛尉
生国越前

石加

職部　生國加賀

寛永四年九月廿八日

為軍家ようつとめ

同年十二月四日切米を被仰出

同十年六月五百石の領地を遣ス

家紋　九の内抱澤瀉

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan